

# ロンドンで暮らして④

## ウォーキングの楽しみ

日系銀行勤務

由紀子アンダーセン

### 意外に自然の多い街

旅行などでロンドンを訪れたことのある人は大都会の中心部を歩いていても意外に緑が多いことに気づくだろう。ちよつとした建物よりはずつと背の高い街路樹がたくさんあり、何より広々とした公園が街の中心に複数ある。ロンドンのほぼ真ん中に広大な空間を占めるハイドパー

ク、故ダイアナ王妃が住んだケンジントン宮殿のあるケンジントンガーデンスがその横に続き、エリザベス女王の住むバッキンガム宮殿にはグリーンパーク、そのすぐ隣にセントジエームズパーク、中心部の少し北側には動物園もあるリージェントパークがある。

公園の多くには広い芝生とたくさんの樹木があり、池や花壇がある場合も多い。リスなどの小動物、ハト・ハクチョウ・カモ・ガチョウ・アヒルなどの鳥類もたくさんいて、公園の周りを囲む交通量の多い道路から距離を置くと、しばし都会の喧騒を離れることができる。芝生ではサッカーやフリスビーなど思い思いのスポーツに興じるグループもいれば

そのまま寝てべったり、ヨガをしたり、木陰で本を読む人もいる。公園内の道路に沿ってベンチが数多くあり、夏には芝生の上で日光浴を楽しむようデッキチェアが有料で貸し出される。公園を歩くとき間や天候にかかわらずジョギングをしている人を必ず見かける。

市内には小さな公園、といっても日本の住宅街にあるような公園に比べると、ずつと大きな公園もあちこちにある。また、私の住むフラットの中庭にはさまざまな鳥類、ハトやリス、たまにキツネも出没するが不思議とカラスはあまり見ない。ロンドンの中心地を離れるとさらに公園の規模は大きくなり、森や野原・草原が延々と続くような所も多くなる。

ロンドンでは居住用不動産物件が慢性的に不足し価格が常に高騰していることを考えると、「こんなに土地があるのにどうして家を建てられないのだろう」と不思議に思うほどだ。

### 充実したフットパス

フットパス(Footpath)とは、ウォーキングやハイキング用に人的に多少整備されたルートのことである。

ロンドンでは日ごろの運動不足解消の目的もあつて週末などにウォーキングをするようになった。便利なのに、ロンドンにはさまざまなフットパスがあり、インターネットで少し検索しただけでもキャピタルリング、グリーンチェーン、ジュビリーウォークウェイ、ロンドンループ、テムズバスなど次々と出てくる。こういったフットパスはルートに独自のロゴマークが表示されていて、誰でもそのマークを目印に辿りながら歩くことができる。中でもテムズパスはその名の示す通り、ロンドンを流れるテムズ河に沿って歩くフットパスで最も良く知られている。ロンドン市内の近場だけを河沿いに進むのもよし、あるいは最初から最後まで全184マイル(294キロ)を



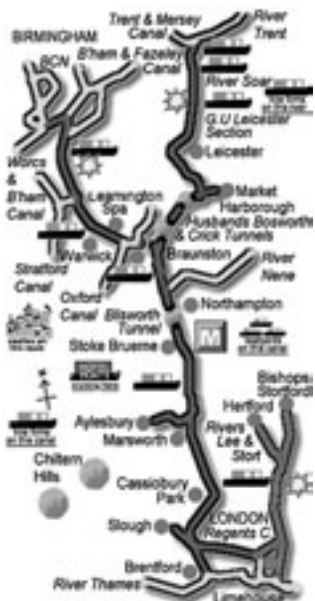
ここはまだロンドン市内。出発点のブレントフォードから6マイルほど歩いた所でパディントン方向へ運河が枝分かれしている



運河沿いには古くからの歴史をもったパブも多い。日曜などは通常、正午から店が開く



トウパスは、この写真のように静かな、緑の多い景観が多い。前方にあるような橋は兩岸を行き交うため、あるいはトウパスの歩行者などが運河を離れて市道にでるために使われる



グランドユニオン運河の地図。地図の下にあるのがロンドンのテムズ河。左下方にあるプレントフォードから運河に分かれ、左上部のバーミンガムへと続くのがこの運河の主要部分

数年前には、夫婦で夏の週末ごとにロンドンループのウォーキングを始めた。これはロンドンの地下鉄のゾーンでいうと一番外側のゾーン5や6にあたる地域、あるいは少しそれを外れるような地域をぐるりと輪(ループ)を描くように歩こうというルートである。地下鉄に乗って出かけ終点に近い郊外のとある駅か

ら、また別の駅まで歩くコースが主だった。このルートにも、もちろんロンドンループのロゴが所要場所に表示されているのだが、整備は万全ではないので時折指示する方向が曲がっていたりロゴが無くなっていることもあり試行錯誤することもあった。しかし便利なことにこのフットパスには専門のガイドブックがあつて、どこを目印にして道を曲がるかなどの詳細な解説文と共に、歩きながら眼にする建物や地域の歴史についても写真や地図をまじえながら説明が加えられている。この本を読みながらのロンドン郊外のウォーキングでは、オフィスビルの中に缶詰で働く週日は眼にすることのない、ほとんど人気がない場所や農耕地、牛や馬などの動物や多くの自然に触れ、ロンドンの意外な一面を見ることができた。

### ロンドンループ

何回かに分けて歩くのを目標にしても良いだろう。その際ロンドン市内の東側(標準時子午線で知られる)グリニッジの海にほど近いテムズバリアから歩き始めて郊外の人里離れた源流コッツウォルズを目指すか、あるいは逆に源流から始めロンドン市内を横断して海を目指すかは各人の好み次第だ。

### 運河(キナル)沿いのウォーキング

「運河」と聞いてはつきりとその姿を想像するには経験が必要かもしれない。運河と言えば私の中では部分的に復元された「小樽運河」の記憶があつたが、実際にそれが利用されていた時代を知らず、どちらかというと単にノスタルジックな観光名所の存在であつた。ロンドン市内にも運河があり前述のロンドンループの時に運河沿いに歩くことは何度かあつたが、それがどこまで続いていて、どう利用されているかについて深く考えたことはなかつた。

さて、ロンドンループのウォーキングを終了し、次なる目標はと考えた時に夫が提案したのが「運河沿いに歩く」ことであつた。運河沿いにはフットパスならぬ「トウパス」、つまりエンジンのまだ搭載されていなかった船(ナロウボート・幅2・1尺ほどの細長い船)を馬などが牽引(トウ)しながら歩くための道がある。それに沿ってロンドンからバーミンガムまで夏休みや週末を利用して歩こうというのが私たちの計画であつた。



運河のすぐ隣に家を持ち、ボートも所有している家庭があるのはうらやましい限りだ



新しいパブはもちろん人気だ。夏は外で飲むビールがそう快。ウォーキングでは食事とトイレ休憩を含め、パブの存在は必要不可欠である

### グランドユニオン運河

ここで英国の運河について少し触れておこう。産業革命当時はまだ道路や鉄道の発達が十分でなく、さまざまな貨物を運ぶ為に数多くの運河が作られた。船を使った運河での輸送は特に陶磁器など壊れやすいものの運送に向き、英国の伝統ある陶磁器メーカーなどに支持されたようである。しかし19世紀後半になると主な輸送方法としての地位を鉄道に取って代わられる。その後運河のほとんどは輸送路としては使われなくなってしまうのであるが、80、90年代にはレジャー（娯楽）としての利用が高まりをみせる。近年では驚いたことに、この需要をさらに促進するべく、およそ100年ぶりにまた新しい運河を作り、同じ運河を往復するのでなく一回りできる形態にしようという計画がある。ナロウボートの登録や税金からの収入だけでなく、「水の近くに住みたい」人々の運河沿いの住宅需要にもつながるので、地元の行政なども積極的に参画しているらしい。

現在グランドユニオン運河と呼ばれる運河はロンドン市内南西部ブレ

ントフォードでテムズ河と交わる所から、ロンドン北西に位置するバーミンガム市まであり、やっと2つのナロウボートが擦れ違うことができ程度の幅の所もある。この間137マイル（およそ219<sup>キ</sup>）で、166のロック（運河の水位差をロックの水門を開閉することで一時的に調節し船が行き来できるようにするシステム）と数多くの橋、2つのトンネルがある。

### 運河沿いの景観への驚き

私たちのウォーキングは7月のある天気の良い週末から始まった。ブレントフォード近くの駅まで地下鉄に乗り、テムズバスを辿り、そこから運河へと枝分かれしている所がスタート地点である。夕方まで数キロ歩いてその後最寄の駅から公共交通機関で帰ってくるので、荷物をほとんど持ち歩かなくて良いという気軽な日帰り計画である。次回は後日その同じ駅まで電車に乗り、運河沿いに歩き、また終了した場所の最寄駅からロンドンの自宅まで帰ってくるという行程を何度か繰り返し返した。夏休みになってからは運河近くのB&B（ベッドアンドブレックファースト

と呼ばれる英国に多くある朝食付きの簡易宿泊施設）に泊まり、数日分の着替えや身の回り品などをリュックに背負ってのウォーキングとなった。

ロンドン市内を歩いている限り運河は平坦なところが多い。運河の両脇には比較的大きなオフィスビルや工場、住居があるが、たくさんの車が行き交う道路からは多少距離があるので、トウパスには日常的な犬の散歩やジョギング、サイクリング、魚釣りを楽しむ市民も多い。野生の草木や花があり、私たちが歩いた時期はブラックベリーがちょうど旬だったので散歩がてら摘んでいる家族連れも見かけた。たまにベンチもあるので、歩き疲れたら休憩することも可能だ。

ロンドン市内を離れると運河周辺の景色はどんどん変わってくる。道路が遠くなり、大きな建物が少なくなり、農場や草原があつて動物がいったり、個人の家や集合住宅が連なっていたり、マリナーナやパブ、テスコなどのスーパーマーケットや小さな個人経営のお店があつたり、あるいは逆に何もない森林に囲まれた道がずっと続いたりときまぎらまで、



ごく一般的なロック。この水門を両側から閉めることで水を溜め、水位を上げる



トンネルに入っていくナロウボートの人たち。歩行者はトンネルの上の森や草原、あるいは普通の道路を歩くことになる



多くのナロウボートが停泊するマリーナ。ロンドンを離れるにつれ、マリーナの規模も大きなもの多くなり、近隣にバブや商業施設などを併設している所もあった

### ロックとトンネル

地域ごとに雰囲気も大きく異なる。自宅の庭から運河にボートで出られるようになっていた所に住む人や、のんびりとしたナロウボートでの週末や休暇を楽しむ人は一体どんな仕事や生活をしている人たちなのだろうと歩きながら想像してみる。私の数少ないロンドンの知り合いにナロウボートを所有している人はまだいないが、運河沿いのウォーキング中に見たナロウボートは数知れず、用途はレジャー限定なのにその普及率にも驚いた。

運河に水位差があると、そこにはロックがある。差が非常に大きい時

には階段状に数個のロックが設置されていて、それまでロック自体の存在を知らなかった私にはこれも驚きだった。また、もつと驚いたのはトンネルにはトウパスがないので昔ボートに動力源がなかったころは人間2人がボートの上に反対向きにそれぞれ横たわり、両足をボートの横に突き出してトンネルの肩部分を歩くことでボートを前進させ通過したという説明だった。私たちもトウパスがないので運河から外に出てトンネルの上を歩かなければならなかったが、数キロにも及ぶ距離だったので昔の人の苦勞がしのばれた。

さて、このように英国のさまざまな景観と人々の暮らしを垣間見る良い機会となった運河沿いのウォーキングであるが、天候や日程の不足などで実はまだバーミンガム市に到達していない。20マイルほどの残り部分は日帰りで行くには電車に乗っている時間が長すぎて効率的ではないので、来年に持ち越されそう。そしてその後はどこを歩こうか、まだまだフットパス選択の余地はたくさん残されている。

## KYOWA PRINTING

質の高い「ビジュアル・コミュニケーション」をささえる商業印刷専門企業——



企業と生活者を結ぶ

協和印刷株式会社

〒063-0834 札幌市西区発寒14条14丁目2番50号  
TEL (011)666-1641・FAX (011)669-2332